

等古事記

〔兼盛集〕我君としごろ、民をめぐみ國をおさめおはしますこと、御まつりごとかずおほくて、山にのぼり水にたはぶれ給ふおほみあそびもみえざりき、西はをぐら山の秋のもみちいたづらにその色をうしなひ、東はむらさい野の春の梅、むなしうそのかげをうしなひ、きしのほとりみづきようすみ、山の聲たかうよばふ、風はえだをならさす、あめはつちくれをやぶらす、世中もたのしければけふの御幸もありますなり、かざりなき我君の御とくを、おいたるは老たるをよろこび、わかきはわかきをよろこぶ、世中のたのしきことは、けふの御幸をためしとすべしとつけしめて、其日の和歌、

子日してよのさかゆべきためしにはけふの御幸をよにはのこさん

〔散木弁謌集春〕伊勢國に侍ける比、むつきのはつねの日、ねいみといひて、家をいで、野にいきて、ひねもすにゐくらして、かやをかりてこがひするおりに、えびらといふなる物にするを、

春たてば初子のいみにたびるして袖の玄たなる小松をぞひく

〔成氏年中行事正月〕九日、例日タル間、御祝等無之、但初子自ニ相當時、見好法師參テ種々ノ祝言ヲ申根松ヲ三本持テ參、其時評定衆之子共親類ノ間、以上意直垂ニテ松ヲ受取テ扇ニ置テ、御二間ノ御妻戸ヨリ、十二間へ令持參時、松ヲ御請取アツテ被置也、見好法師ハ管領評定奉行ノ亭ヘモマカリ出、自公方様御祝、自政所下行、其外祝言アリ、

〔土左日記〕廿九日、ふねいだしてゆく。中略。む月なれば、京のねの日の事いひいで、こまつもがなといへど、海なかなればかたしかし、ある女のかきていたせらうた、おばつかなけふは子の日かあまならばうみまつをだにひかましものを